HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	フランクフルト学派研究資料 (二) : (IV) Th.W.アドルノ『批判』
Author(s)	奥山, 次良; 白石, 達男
Citation	北海道大学人文科学論集, 18, 71-78
Issue Date	1981-03-29
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/34362
Type	bulletin (article)
Note	奥山次良, 白石達男(共訳)
File Information	18_PR71-78.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

（Ⅳ）Th・W・アドルノ『批判』

奥山　次良
白石　達男　共訳

批判についていくつかのことを、政治との関連でのべたい。とはいえ政治は、政治上のさまざまな制度、手続き、運用規則などにうかがわれるような、閉じたすきまのない分野ではなく、それは、ただ社会のさまざまな力の動きとの関わりにおいてのみとらえることのできるものであり、そしてこの動きがすべての政治的なものの実体を構成し、うわべの政治現象によっておおいかくされるのであるから、批判の概念にしても、狭い政治の領域に限られてはならない。

批判はあらゆる民主主義にとって本質的である。民主主義は、批判の自由を要求するばかりではなく、批判への衝迫を必要とする。民主主義の本質を定めるものは、まさしく批判である。史実の上では、ロックからモンテスキューとアメリカ憲法を経て今日に至るまで、すべての民主主義が依拠している三権分立の思想の肝心かなめの点が批判にあることを、思い浮べさえすればよい。チェック・アンド・バランスの機構、即ち、行政、立法、司法の相互制御とは、そのつどこれらの権力の一つが他の権力に批判を加え、こうしてそれぞれの権力の、この批判的要素がなければ陥りがちなきままさを制限する、ということである。民主主義の前提である成熟と批判とは、切りはなすことができない。自分で語る者は、自分で考え、単に人の口まねをするのではないから、成熟している。つまり彼は、後見されていない。このことは、しかし、流布されている意見に対して抵抗する力のうちに、そしてまた同じことになるが、現に存在する諸制度に対して、即ち、それが在るというだけで正当化されている単に制定されているだけのすべてのものに対して、抵抗する力のうちに、証示される。このような抵抗は、認識されたものと、単に慣習上、あるいは権威による強制の下で受け入れられているものとを見分ける能力として、批判と同一である。批判という概念は、実際、ギリシャ語の「弁別（クリーネイン）」に由来している。理性の近代的概念を批判と同一視する者がいても、それは何ら誇張ではない。啓蒙家カ

ントは、社会を、それに責任がある未成熟さから解放しようとし、そして他から命令されたものへの服従である他律に反対して、自律を、即ち自らの分別に基づく判断を説いたが、自分の三つの主著を批判と名づけた。このことは、カントが、その限界をはかり、その規則を構成しようと企てた精神的諸力にあてはまるだけではなかった。カントの力は——たとえばクライストはまだこれをいきいきと感じてた——非常に具体的な意味で批判の力であった。カントは、彼以前に承認されていた合理論の諸体系の独断主義を批判した。『純粋理性批判』は、なによりも先ず、ライプニッツとヴォルフに対する辛辣な批判であった。カントのこの主著は、そのさまざまな否定的な帰結によって影響力をもったのであり、純粋思惟の限界の踏み越しについて論じたその最も重要な部分の一つは、徹頭徹尾否定的であった。

しかし、理性と市民的思考一般の根本部分である批判は、決して、言い分から考えられる程に精神を支配しているものではなかった。全てを破壊する者と二百年前カントは呼ばれたが、その彼にしても、時として批判を不当なものと非難するそぶりを示していた。このことは、彼の語いの中に現われている。たとえば「詭弁をろうする（フェアニュンフテルン）」というようないくつかの嫌な言葉がそれである。これらは、単に理性の限界の踏み越しをとがめるだけのものではなく、カント自身の見解によれば、この踏み越しへさけがたくおいやられる理性使用を統御しようとするものである。ついにはヘーゲルである。彼において、カントをもって始まった運動は頂点に達する。そして彼は、多くの箇所で、思考一般を否定性と、従ってまた批判と等置するが、並行して彼には、批判を停止させようとするこれと相反する傾向がある。ヘーゲルの場合、自らの悟性の限られた活動を当てにしている者は、政治上の侮蔑の言葉で「理屈屋（レゾヌール）」と言われる。ヘーゲルは、そのような人をうぬぼれていると非難する。なぜなら、そのような人は、自らの有限性を考慮せず、自らをより高次のものの下に、即ち総体の下に概念的に服属させることができないからである。しかし、ヘーゲルにおいて、このより高次のものとは既成のものである。批判に対するヘーゲルの嫌悪は、「現実的なものは理性的である」という彼のテーゼと密接に関係している。ヘーゲルのこの尊大な訓戒によれば、既成のもの存在するものと、理性との対立にこだわらずに、この存在するものの中に自分の理性を再発見する者が、本当に自分の理性を支配している人である。個々の市民は、現実の前に降伏することになる。批判の放棄が歪曲されて高次の英知とされる。若きマルクスの既成のものすべてに対する仮借ない批判の定式は、このことに対する端的な返答であった。成熟したマルクスも、依然として彼の主著に批判という副題をつけた。

右のヘーゲルのテーゼの内実、わけても批判に反対する彼の傾向が総括されている著書、『法の哲学』の内実は、社会的である。社会学者でなくても、理屈屋と世界改良屋に対する嘲笑の中から国民を平穏にさせようとするもったいぶったかれのお説教を聞きとることは、容易である。国民は、無知ゆえに——この無知を改めることは、国民の後見人にとって明らかに都合の良いことではない——彼らに

宣告された公権力の決定に賛成しないのであり、結局のところすべてのものはその最善の状態にあり、そして、生活において彼らの上に位する者は精神的にも必ず彼らに優越しているということを理解できないのである、と言うのである。批判的精神の近代的解放と、それと同時に生じた批判的精神の抑圧との間の矛盾は、全くブルジョア的である。即ち、初期の局面から、ブルジョア階級は、彼ら自身の諸原理からの帰結が彼ら自身の利害状況を越え出てしまうのではないか、と懸念しなければならなかった。この種の矛盾をハーバーマスは、世論――政治的に有効なすべての批判の最も重要な媒体――について明らかにしている。この世論は、一面では社会的主体の批判的成熟を集約しようとしながら、他面、商品となってしまい、いっそう高く売りつけようとして批判の原理に反してはたらくのである。

精神の中心的動因である批判は、世間のどこを見てもあまりに不人気であるが、ドイツでは、このことが、容易に忘れられている。しかし、とりわけ政治の領域における批判敵視の場合、特殊ドイツ的なものについても考えるべき理由がある。完全な市民的解放は、ドイツでは成功しなかった。あるいは、市民的解放の前提である散在する企業家の自由主義が空洞化した局面ではじめて、成功したにすぎない。そしてまた、他の多くの国々でブルジョア階級の強化に並行して達成された民族国家の統一が、歴史におくれてはかどらず、つかの間の間奏曲になった。このことが、ドイツ人の統一および和合に対する精神的外傷（トラウマ）をひき起こしたのであろう。多数の合力が民主主義的な意志を形成するが、この外傷は、その多数のうちに、もろさをかぎとるのである。批判する者は、全体主義的組織に走ろうとする合一のタブーを破るのである。批判者は分断者になり、全体主義の言い草によれば売国奴になる。分派抗争と称しての中傷は、ナチスの宣伝手段として欠かせなかった。合一のこの外傷は、ヒトラーの死後も続き、おそらく、ヒトラーによってひき起こされた戦争のあと、ドイツの分割によって、なおいっそうその激しさを増したにちがいない。ドイツに民主主義が遅れて到来したということは、誰でも知っている。けれども、その遅れが精神の分化の内部にまで尾を引いているということは、なかなか一般的に意識されない。主権をもつ国民に徹底するためにドイツにおいて民主主義が出会う諸困難の中で、経済的な困難および直接に社会的な困難と並んで、次のような困難もまたないがしろにできない。即ち、前民主主義的なまた非民主主義的な意識形態が、突然もちこまれた民主主義のさ中で保持されて、人々が民主主義に取り組むことを阻止するのである。このような後進的な行動様式にあたるのが、批判に対する不信と、どのような口実を使っても批判の息の根を止めようとする傾向である。ゲッペルスは、批判家という概念をあらさがし屋という概念にひくめて、不満分子という概念と陰険にもいっしょにしてしまったし、また彼は、あらゆる文芸批判を禁止しようとしたが、このことによって彼は、単に自由な精神の動きを思いのままにあやつろうとしただけではないであろう。この煽動家は、社会心理学的に計算していた。彼は、あまねく、批判に対する絶対主義に由来するドイツ

的偏見を、糸口にすることができた。彼は、あやつられた人々が心の底で言いたがっていることを言ったのである。

かりに誰かがドイツにおける批判敵視の解剖学を企てたとすれば、まちがいなくその人は、批判敵視が知識人に対する怨念に結びついていることに気づくであろう。おそらく世論（公然の意見）の中では、あるいはフランツ・ベームの表現をかりれば非世論（非公然の意見）の中では、疑いをもたれた知識人は、批判する者と同一視されるであろう。反主知主義の素姓が、権力国家的思考であることは明らかである。批判は責任あるものでなければならない、と何度もくり返し唱えられる。このことはしかし、帰するところ、責任ある地位にある人々だけがもともと批判する権利をもっている、ということである。事実、つい先頃までは、教授たちのような公職についている知識人にまで反主知主義の力は及ばなかったのである。たしかに教授たちは、仕事の内容から見れば知識人のうちに数えられなければならないであろう。けれども一般的には、彼らは、その職業上の公的権威のゆえに従前の世論によって高く評価されたのである。もっとも学生たちとの衝突は、彼らが実際には無力であることを明らかにした。批判は、いわばなわばりでしきられる。批判は、市民のもつ人間の権利や義務から、承認され保護された地位によって資格づけられる者たちの特権に移される。自分の意見を押し通す権力をもたず、また自分を公けの階層秩序の中に編入しもしないで批判を行う者は、沈黙すべきである——これが、形式的には同権のドイツにおいて国民の狭い了見がさまざまにくり返すきまり文句の形態である。既成の事態に制度的にからみ合わされている人間が、ふつう、この事態に批判を加えることをためらうのは明らかであろう。彼らは、行政権上の衝突よりも自分たちのグループの意見との衝突を恐れる。公的責任を負う人々の批判としての責任ある批判と、無責任な批判、即ち、結果に対してその責任を追求できないような人々の行う批判とを分けることによって、批判は、前もって骨抜きにされる。何の地位ももたない人々から表立たずに批判の権利が剝奪されて、教養の特権が、とりわけ試験の垣根でかこまれた経歴が、誰に批判を許すかの法廷になる。しかし、本来この法廷は、批判の真理内容だけでなければならない。これらすべてのことは表立たず、制度的に定着していないが、無数の人々の前意識のうちに非常に深く根ざしているため、一種の社会的な管理がここから始まる。最近では、階層秩序——ちなみにこれは、エリートの時代にあっては、もはや公務員に限られるものではない——の外にある人々が、たとえばある特定の都市での法律の運用に対して批判を加えるという事例にこと欠くことはない。そのような人々は不平家として即座に片付けられた。これに対して、個人主義的に自立した者、異論を唱える者が、ドイツにおいてはおろか者としてうとまれるという仕組については十分言及されていない。事態は、いっそうきびしさを増している。公的意識の批判敵視の構造によって、異論を唱えるタイプの者は、実際には不平家の位置に置かれ、かたくなな批判に突きすすみさえしなければ、この者に不平癖は許されるのである。そして、断固とした批判の自由は、それに固有の力学によっていともたやす

くミヒャエル・コールハース――彼がドイツ人であったのはいわれのないことではない――の態度へ転化する。ドイツにおける世論構造を変えるための最も重要な条件の一つは、私が示唆した事態が広く意識され、政治の授業などで取り扱われ、それによって、宿命的に盲目的なこの事態の力のいく分かが失なわれる、ということであろう。時として、ドイツの世論の批判に対する関係は、全く本末転倒しているように思われる。というのも、自由に批判を行う権利が、民主主義社会の批判的精神に敵対する人たちのために一方的に請求されるのである。けれどもそのような悪用に逆らう用心深さこそが、世論を強化する。ドイツにおいては依然として、世論のこの強さが欠けているし、それは単なるアピールによって作り出されはしないのである。

自由を求める伝統を引き合いに出すような世論の諸機関もまた、世論と批判との歪んだ関係を特徴づける態度をとっている。多くの新聞は、反動側に組するとは全く思われたくないから、類似点に事欠かないアメリカで「尊大な（ポンティフィカル）」という言葉で特徴づけられる論調を得ようときゅうきゅうとしている。新聞は、まるでいろいろな論争を見下しているかのように語り、円熟――これにはおば様ぶりという名がふさわしいであろう――を気どっている。新聞のこのごたいそうな優位さは、しかし、たいていは御上の擁護に役立つだけである。権力に対しては、極めて用心深く、その善き意図にかまけないように、といましめるのがせいぜいである。このような新聞の言葉は、政府御用の何一つを通達していない場合でさえも、政府通達の言葉をひびかせている。尊大な態度の背後に、権威に拘束された態度がある。このことは、尊大な態度をとる人々においても、巧妙にねらわれていた購読者においても同じことである。依然としてドイツにおいては、権力との一体化が支配している。この点で、強権政治と内面的にもまた外面的にも一体化しようとする危険な潜勢力が、その機会をうかがっているのである。制度改革の際の用心深さは――この改革は、批判的意識によって要求され、行政府の裁量に大きくゆだねられる――選挙人集団に対する恐れに基づいている。この恐れによって、批判は容易にその効力を失う。この恐れは、同時に、批判にその関心があって当然の人々の間に、批判反対の精神がどれほど広く浸透しているか、を示唆している。

批判の無効性についてはドイツには、おそらく軍隊にその起源をもつと思われるある特殊なモデルがある。即ち、部下の不正や過失を知っていながら、かれらをどんな犠牲を払ってでもかばおうとする傾向である。軍隊の階層秩序の中では、このような団体精神の抑圧的要素が到るところで見られるであろう。けれども、私が誤っていないとすれば、この軍隊的な行動図式が、民間の領域を、とりわけ特殊政治的な領域を完全に支配しているというこのことが、特殊ドイツ的である。あらゆる公的批判に対しては最終的に責任を負う、批判された者の上部機関が、委細かまわずとりあえず批判された者を擁護し、外に向かってこの批判をたたいてくれる、という思いこみから、人々は脱け出ていない。この仕組については、いずれ社会学が徹底的に研究してくれるであろうが、これが非常に深く浸透し

ているために、ヴィルヘルムの時代に、上官についてすすんで苦情を申し立てた兵士に与えられたのと同じような運命に、政治的批判はあらかじめ脅かされているのである。議会における国防委員制度に対する怨念は、あらゆる領域にとって象徴的である。

ドイツにおける批判に対する損われた関係は、おそらく、批判の無効さという点で最も明瞭になる。ドイツが、ウールリッヒ・ゾンネマンの言う果てしなく要求をいいつのることのできる国という名称にふさわしいとすれば、これは、右のことに関係がある。世論の圧力によって誰かが葬り去られてしまった、とはきまり文句であるだろう。しかし、圧力を加える世論が形成されず、たとえ形成されても何の結果も生じないという方が、このきまり文句よりもいっそう工合が悪い。ドイツにおける世論の帰結を、古い民主主義国であるイギリス、フランス、アメリカにおける世論の、ここでは在野の批判の帰結と比較して研究することは、政治学における一つのテーマであるだろう。私は、このような研究の成果を先取りしようとは思わないが、しかしそれを想像することはできる。一つの例外として、シュピーゲル事件があげられるとすれば、次のことが考慮されなければならない。即ち、あの場合に、世論の担い手として抗議する新聞がめったにない熱意を示したのは、批判の自由及びその前提としての情報の公開と結びついてではなく、情報のニュース価値とか、市場価値といった新聞自身の手近かな利害が脅かされていることを知ったからである。私は、ドイツにおける有効な公的批判のいくつかの手掛りをみくびっているのではない。ある州の極右的な文部大臣の失脚は、その一つである。しかし、当時ゲッティンゲンにおいてみられたような学生と教授との連帯がもはやどこにもみられない今日、それと似たような事がはたして生じうるのかどうかは疑問である。私には、まるで公的批判の精神は、それが政治的なグループに独占され、それによって公然と危機に瀕してからというもの、目に見えて後退してしまったかのように思われてならない。どうか思い違いであって欲しい。

他の国々において類似なものを観察する機会をもたない者が容易に想定する程極端ではないにしても、批判反対の図式は、本質的にドイツ的なものである。この図式は、哲学から、理屈屋を非難するまさにあの哲学から、積極的なもの（ポジティーヴェス）を請求する雑談に転落した。批判という言葉がそっくり許容されるようなとき、あるいは自分で批判的に応対してみるとき、いつでも誰でもこの言葉に建設的（コンストルクティーフ）という言葉の伴っていることがわかる。批判されたものに代ってよりましなものを提案できる者だけが、批判をしてよいと仮定される。美学の中で、レッシングは、二百年前にこのことを嘲笑していた。積極的なもの（ポジティーヴェス）の履行義務によって、批判は最初からてなづけられ、その激しさが奪われる。ゴットフリート・ケラーの小説の中に、彼が、建設者への要求を、砂糖菓子のような甘い言葉、と名づけた箇所がある。悪くなったものから空気と日光を断つとかびがなくなる、それだけでもかなりのことだ、といった工合に彼は論じている。実際、批判に、よりましなもののすぐに役立つ推薦状を添付することが、いつも可能であるわけではない。もっとも、批判がこのように

すすめられることはよくある。その場合、批判は、さまざまな現実と、これらの現実が引き合いに出すさまざまな規範を対決させるのである。規範に従うことは、たしかによりましな事ではあるだろう。数十年前、カール・クラウスのみならず、それほど過激ではないエーリッヒ・ケストナーのような文筆家も論難した「積極的（ポジティーフ）な」という言葉は、いつのまにかドイツにおいては魔力のあるものとなった。ひとりでにこれに、パッととりこにされる。この言葉のいかがわしさは、進歩的な構想によれば社会が向かっていくはずのいっそう高次の形態が、現在の状況においては、もはや傾向として現実から具体的に読みとれない、という点にうかがわれるであろう。このゆえに、社会の批判を断念しようというのであれば、社会は、より高次の形態への移行を妨げる当のいかがわしいものの中にのみ固定されることになる。よりましなものという客観的な偽装は、抽象的に、巨大な全体に関わっているのではない。批判されるそれぞれの個別現象の中で、人々は、即座にあの限界につきあたる。建設的（ポジティーフ）な提案の要求は、再三満たされなくなる。それゆえに批判は、ますます調子に乗って攻撃される。社会心理学的に見れば、建設的（ポジティーヴェス）なものへの熱中は、薄いおおいの下で活動する破壊衝動の外面の形姿である、ということを指摘しておけば十分であろう。建設的（ポジティーヴェス）なものについて最も多く語る者は、破壊的な力と一体である。実践へそのまま移されてよい建設的（ポジティーヴ）なものへの集団的な強制は、いつのまにか、社会と最も厳しく対立していると思っている当の人々を捕えた。こうして、彼らの行動主義が、支配的な社会の風潮にとりこまれるのは言うまでもない。このことに対しては、虚偽なものは、いったんはっきりと認識され確定されると、すでに正しいものの指標、よりましなものの指標であると、スピノザの有名な（「限定は否定である」という）命題の形を変えて、言われなければならない。

あとがき

(1) この訳文は、アドルノ著作集第一〇巻の2に収められている論文「批判」によって作成されたものである。この論文は、もともと、一九六九年五月二六日に南ドイツ放送から放送された講演のテキストである。

(2) アドルノの批判理論は、その批判機能そのものを、それが機能する状況の中に組み入れて、「批判的に」問題にしなければならない。このアドルノのメタ・批判によれば、ドイツの状況において、「批判」は、つねに批判の敵視へ、批判の「批判」へ転質する。いいかえれば、状況のこの転質機能が、批判をうながすとともに、この「批判」を批判の敵視へ、批判の「批判」へ硬直させる。批判は、たんに批判であることによって、状況の肯定である。

(a) 従って、批判が、意識的に、その本来の趣旨において批判であろうとすれば、状況の転質機能そのものに向わなければならない。状況の否定的機能が、批判的にそれとして明らかにされる（否定的なものの否定）ならば、その限りにおいて、この明らかにされたものは同一なもの、実定的（ポジティーヴェス）なものである。批判は、この同一なものの

経験科学による分析を主導する。

(b) それとともに、この同一なものは限定されたものであり、その限りにおいて否定であるから、いいかえれば自己超越的であるから、このことが、同一なもの（状況の転質機能）の経験科学的分析に批判的意義を与える。同一なものは、この分析にザッハリッヒに媒介されて同一性を破り、非同一なものであることを露呈する。

(c) アドルノの場合、1、主観は対象的に人間的なもの（物象化された社会）によって、否定的に媒介されている。すなわち、人間は、社会の中に否定的にさしかけられていて、この社会との同一化を要求されているが、それとともに、この否定、同一化、あるいは抑圧に対する否定を、あるいはそれからの解放をうながされている。（矛盾の客観的側面）2、主観は、対象的に人間的なものに媒介されて、これに批判的・否定的に関わる。（矛盾の主観的側面）3、この批判的・否定において、現実的に人間的なものが、現に、端的に在るもの》das Positive《としてすでに開かれている。4、しかし、この現実的に人間的なものを単にそれとして確定し、固定されたもの》das Positive《とすることは、対象的に人間的なものの徹底化に外ならない。

(3) 本稿は、フランクフルト学派研究のための資料として作成されたものである。訳文は、第一稿を白石が作り、第二稿を奥山が作った。さらに訳文の整理を白石が行い、奥山が体裁を整えた。